

## 中部エネルギー市民会議 設立趣意書

3・11 東日本大震災、福島原発事故を契機に、この地域では浜岡原発が停止状態となっています。

浜岡原発をどうするのか？ この地域のエネルギー問題は？ 誰がどのように決定を下すのか、先が全く見えてきません。

現在の我が国の政治状態では、今回のような不測の事態に対応できません。

エネルギーは地域にとって必要不可欠なものです。浜岡原発の今後とこの地域のエネルギーの持続可能性に対しての方向づけを誰かが決定していかねばなりません。

しかしながら、これまで我が国のエネルギー政策は、形の上では国民の意見を反映する仕組みがあるものの、国民は、エネルギー政策の策定に対し、積極的には参画・関与してきませんでした。このため、実態として国が主導的にエネルギー政策を決定してきました。今後は、地域の一人ひとりの話し合いを通して、その地域の声が国に届くこと（中部だけが良ければということではなく、国全体のことを考えつつ）が必要です。

とは言え、話し合いを困難にしているものが存在しています。

ひとつは原発事故によって広がった放射能に対する不安から来る、エネルギー政策への多種多様な考え方の存在です。

もうひとつ気になることは、電力を享受してきた側の意識です。利用者である多くの市民は、被害者としてふるまっていないかという点です。

この地域の未来に責任を負わず、人任せにできてしまった。その意味において我々は「加害者」でもありません。加害者としての当事者意識があれば、無関心、無責任とならないはずです。

さらに困難なことは、原発の安全管理に対し、人々は電力会社はもとより、国、更には原子力村に関わる専門家にも不信の目を向け始めています。そして、多くのマスメディアの報道に対しても、人々ほどの情報を信頼してよいのか困惑している点です。

今必要なことは、この地域の人々が信頼できる議論の場を設け、地域が考える今後のエネルギーのあり方について幅広い議論を行うことが重要です。

そしてこの場で、原子力発電を含む、すべてのエネルギー源の持つリスクと便益を客観的な情報をもとに議論を重ね、地域の信頼とつながりをもとに、一人ひとりがこの地域の将来を決定するのだという自覚を持って、自ら判断できる状況を作らねばなりません。

国に頼らず、地域に暮らす私たちが、地域のためにこの場を形成し、予断を持たずに公正に運営する「中部エネルギー市民会議」という場を創り上げます。

3・11をムダにしないために。

平成二十四年二月二十日

呼びかけ人一同

## エネルギーの未来を探します。

東日本大震災と福島第一原発事故は、私たちにたくさんのはてな、を突きつけました。

私たちは、地震のこと、防災のこと、私たちの大切ないのちや地域のことをどれだけ知っていたのでしょうか。自分たちの問題として受け止めていたのでしょうか。

電気やエネルギーのことも同じです。私たちの暮らしには、夜も昼もまぶしいほどの光があふれています。その電気を、石油などさまざまなエネルギーが支えています。それなのに、私たちは私たちを照らす光が、どこから来て、どこへ行くのか、ほとんど何も知りません。その危うさにはてな、を提案したのも、あの震災でした。

思い出して下さい。

13年前、名古屋市はごみ非常事態宣言を出しました。埋め立て処分場からごみがあふれ出す瀬戸際でした。

そのころ私たちは、自分たちが毎日必ず出すごみが、どこから来てどこへ行くのか、ほとんど知りませんでした。関心もありませんでした。ところが、非常事態宣言をきっかけに、名古屋のごみの現状を知り、何ができるかを話し合うことができました。市民の総意と知恵で劇的にごみを減らすことができました。その成果は全国に影響を及ぼしました。

そして今、名古屋は環境先進地と呼ばれ、一昨年には、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を開催することができました。

福島第一原発の惨状は、エネルギー非常事態宣言です。原発に賛成だとか、反対だとかそんな小さな問題ではありません。私たちの未来を決める瀬戸際です。13年前と同様、だれもが考えなければならぬ宿題です。

愛・地球博とCOP10を成功させた中部です。解決の知恵も力も技術もちゃんとあるはずです。

まず、電気やエネルギーについて、知ることから始めませんか。知れば、意見が生まれます。自分だけの意見です。多くの意見が集まればよい知恵が生まれます。その知恵が放つ光は、私たちをきつと正しい選択へと、導いてくれることでしょう。

中部エネルギー市民会議 呼びかけ人

飯尾 歩

萩原 喜之